

## 教育において

### 殻を破り自分を広げるべきは誰か？

—いっしょに生きる技術としての発達の最近接領域—

横浜国立大学教育学部 有元 典文

1. はじめに：変わるべきは誰か？ うすうすは気づいていたことだった。人を育て発達させるべき教育において、一番育たなくてはならず、発達しなくてはならないのは、授業者であるこの私だった。いろいろな経験とふりかえりの結果、だんだんとそう気づき、確信しつつある。元来引込み思案で自己中心的な私が、講義という社会的関係の隠れみに隠れて、学生や先生方、児童生徒に、変われ、学習しろ、発達せよ、と一方向的に伝えることの矛盾。そこには教えることと学ぶことの非対称性がある。ここで非対称性とは、教える側がより良く知り、より上手にでき、もう一方の学ぶ側がより無知でより能力が低いといった、両者の関係のアンバランスさのことだ。教育の目的は児童生徒の「人格の完成」であるが、さて、そのために指導・支援をする教員の人格はすでに完成済みなのか？教師の姿が目指すべき完成形なのか？教育において発達とは何か、変わるべき主体は誰か、それはどのようにしてか、ということについて考えてみたい。

2. 発達の最近接領域＝みんなだとできるゾーン 教え手と学び手の能力の非対称性を違ったアングルから見てみよう。指導者と学習者に上下関係を見て取るのを一旦停止し、改めて人の学習と発達を眺めてみたい。教え手と学び手の関係を横並びの、水平的にして共同的な「場（ゾーン）」としてとらえてみるのだ。

1920～30年代に活躍したロシアの心理学者ヴィゴツキーは、人間の発達をとらえる際に、要素に還元するのではなく、統合的＝弁証法的（ダイアレクティカル）にとらえる必要があるとして、有名な「水のたとえ」を示した（ヴィゴツキー、2001）。ここでヴィゴツキーは人間の発達を「水」になぞらえる。科学的研究手法では、水という実体を「酸素」と「水素」という構成要素に分解して理解しようとする。しかし水の持つ「火を消す」という性質は、こうした要素還元を行っても決して説明されない。なぜなら水素はそれ自体が燃焼し、酸素はものの燃焼を助け、そのどちらにも消火の能力は備わっていないからだ。水の性質は、水そ

のものとして見るしかない。人間の発達を理解するためにも、その場で起きていることを丸ごととらえる視点が大事だ、というわけである。

児童生徒の発達もしばしば要素に還元して説明されている。大きくは教え手と学び手という要素への二分である。個人の「学習」や「発達」は、指導案、教材教具、児童生徒の学力、体力、気質、などの要素（変数）に分解して説明される。ところがヴィゴツキーは、人間の発達を個人内ではなく個人間、つまり「ゾーン」の作用としてとらえた。有名な「発達の最近接領域」の理論である。ヴィゴツキーは子供の発達に二つのレベルがあると考えた。一つは独力でできるレベル、もう一つは指導者や仲間と共同するとできるレベルである。後者は潜在的な発達の未来だと考えられた。この二つのレベル、独力と共同の間、つまり発達の現在と未来の距離を「ゾーン」と呼び、発達はゾーンにおいて集合的（みんなと一緒に）に創造されると考えた。ヴィゴツキーにとっての発達とは、個人内の変化ではなく、みんなで成し遂げることであり、「ともに実践（working together）する集合形態」によってクリエイトされるものであった（ホルツマン、2014）。発達とは、みんなが発達するための＜みんなだとできるゾーン＞をみんなと一緒にになって創りあうこと、というわけだ。これは、人間をそもそも社会的な存在としてとらえ、人間の実践の共同的な特徴を大切にする立場である。

3. アンサンブルをよく見せよう 教育をヴィゴツキー的な観点でとらえ直してみよう。学習と発達を個人内の現象ではなく、個人間での「共同＝ワーキング・トゥギャザー」だと考えてみるのだ。教育を単に＜個人の資質の育成＞だと考えると、これは身の回りにある社会的生活の実体を十分には反映していない。家庭でも学校でも遊びでも仕事でも、私たちの社会的生活は＜個人間の共同＞から成り立っているからだ。相手のあることなのだから、個人の資質がそのまま通用するわけではない。個人内と個人間では徹底的に質的な違いがある。他者との共同では思いがけないことも起きる。だから私たちは常に、時事刻々と、即興的に共同している。答えのない共同作業＝アンサンブルを常にみんなで行っているのが社会的存在としての人間の基本的な条件なのだ。

もう一歩踏み込んで、ちょっとした思想的冒険をしてみよう。私たちの行動の説明として、個人の資質や自由意志を用いるのをやめてしまうのだ。考え・ふるまう「主体」を、個人ではなく「個人間のアンサンブル（共同作業）そのもの」だと考える。そんなラジカルな人間観で私たちの社会的生活を見てみる。社会的生活において、私という個人はおらず、意思も行為もすべてみんなの即興的な共

同だと考えてみるのだ。「私」ではなくアンサンブルが考え、「私」ではなくアンサンブルが行動し、「私」という存在は錯覚だ！と考える。

こうして抽象的に表現するといかにもラジカルで突飛な発想のようだが、しかし、教師や指導者として普段の授業・指導を思い起こせば、行為主体を個人ではなくアンサンブル（個人間の共同）だとする見方に意外さはないだろう。たとえば、指導案は、授業者個人の頭の中のプランであるが、児童生徒の実態を前提にしなければ作ることができず、じっさいの授業においても、児童生徒の反応に呼応して、指導・支援の細部は目まぐるしくリアルタイムに変化していく。これをひとり教師の職能が成し遂げていることだ、ととらえることもできるが、教師-児童生徒という共同体による、即興的共同だととらえることもできるだろう。教育とは、教え手と学び手が一緒に成し遂げている共同作業なのだ。

共同作業だと思えば、教師が言わなくなる／言えなくなることもある。それは「なんでできないんだ？」という言葉だ。なぜならそれは共同作業であり、誰かが何かができないとすれば、それはアンサンブルがうまく機能していないからである。水にとって、水素と酸素のどちらかがより貢献しているわけでもなく、それは、どちらもの貢献としてのアンサンブル、としか言いようがないことだ。

**4. インプロのすすめ：いっしょに生きる技術** アンサンブルであるということは、誰の貢献だとか誰の失敗だとかを言うことができないということである。私は自分の講義を棚に上げて、学生が聴いていない、とか、分かっちゃいない、と思ってしまうわけだが、それは「お前のせいで水になれない」と水素が酸素にいうようなことだ。「右手と左手、どちらが拍手の音に貢献しているか？」と問うようなことだ。授業をアンサンブルととらえるなら、教師がすべきなのは、自分を含めたアンサンブルをよく見せるための努力だ。それは共同の価値の追求だ。

ヴィゴツキー的な発達観は、人間や社会を見たままそのままとらえるのではなく、「関係の効果」としてみるということになる。授業中の立ち歩きが目に見えるのは、席の配置と授業に期待される秩序との関係によってである。駅の雑踏に立ち歩きは見えない。共同とは誰かの貢献ではなく、皆の努力の総和の効果である。こうした人間の関係論的理解は、子供たちが社会の成員となる上でとても重要だ。

チームスポーツ、演劇、バンド演奏などを経験すると、こうした人間の関係論的理解が得られるかもしれない。しかし一般には理解が難しい。例えば授業中の子供の発言は、実際は学級経営や他の児童生徒との関係の効果である。教師のうながしや周りの子供の聞き手としてのふるまい、学習ルール、教材教具、いろい

ろな要素が関わって、子供のある時点でのある発言は関係的に成立している。しかし発言した子供本人も含め、なかなかこうした理解には至らない。「さくらさんが発言した」という事態は、さくらさん独りの主体性に帰属され、「諸要素の総和としてさくらさんの発言に至った」とは思いにくいものだ。

インプロは行動の関係論的理解の早道だと知った。インプロというのは「どうやればいいか前もって分からない」（ロブマン、2016）ような、共同的で創造的な即興演劇のことを指す。例えば複数の人間が一人の人間として息を合わせて発話をする「ワンボイス」というインプロゲームでは、「主体性のアンサンブル性」が体感できる。ぜひ試して欲しい。二人で何かに近づき、指差し、その名前を言う、という単純な行為も、相談なしに二人でびったり声を揃えて行るのは難しく、そして腹を抱えるほど可笑しく、アンサンブル自体が意思決定し行動すること（とその喜び）をアンサンブルの一員として理解できる。インプロのような答えのない共同作業では、主体性のアンサンブル性が改めて意識化され、可視的になり、アンサンブルに貢献することを積極的に目指せるようになる。それに気づけば、日々が発達環境になる。人が共同し合う社会そのものが学校に、また教科書になる。

教育においてその内側から教育という殻を破ってみる。教科書にある既知のやり方を個人内に獲得していくのではなく、誰もやり方を知らないことにアンサンブルで取り組み、支え合う体験に挑戦してみる。このことがクラスの可能性を広げ、教師としての自分を広げもするだろう。そして実はこうしたことは日々の教育実践の中でしばしば行われていることでもある。そのことに気づいたら、自分を含めた授業というアンサンブルを、クラスみんなでもっと良くしたくなる。そうなると教育における発達は、発達の場をみんなで一緒にクリエイトすることになる。ともに発達することは、人間であることの基本的な条件であり、そのことを味わい、理解し、喜び、追求できれば、子供達が社会に出る準備は完了したと言えるだろう。教育とは単に個々人の知識技能の獲得機会ではない。いっしょに生きる技術をいっしょに学びあう場でもあるのだ。子供ももちろん教師も。

#### 【参考文献】

- ヴィゴツキー, L. S. 柴田義松訳 2001 新訳版・思考と言語, 新読書社.  
Vygotsky, L. S. (2004) Imagination and Creativity in Childhood. *Journal of Russian and East European Psychology*, vol. 42, no. 1, January-February 2004, pp. 7-97. M.E. Sharpe, Inc.  
キャリー・ロブマン&マシュー・ルドキスト (2016). 「インプロをすべての教室へー学びを革新する即興ゲーム・ガイド」. ジャパン・オールスターズ訳. 新曜社.  
ロイス・ホルツマン (2014). 「遊ぶヴィゴツキーー生成の心理学へ」 茂呂雄二訳. 新曜社.